

第 66 巻の広告掲載会社名および商品名

アステラス製薬	(株)		(株)	大塚製薬工場	ビーフリード
中外製薬	(株)	ヘムライブラ	田辺三菱製薬	(株)	ルパフィン

(ABC 順)

編集委員会

編集委員長：伊豫田 明
 編集委員：赤羽 悟美 弘 世 貴久 池田 隆徳
 石井 良和 片桐 由起子 近藤 元就
 三上 哲夫 水野 雅文 中野 裕康
 佐藤 二美 島田 英昭 和田 弘太
 編集顧問：杉山 篤 津熊 久幸

(ABC 順)

編集後記

自分の研究者人生の中で top journal (Nature, Cell, Science の 3 大誌) になんとか論文を出そうともがいていた時代に、何度も思い出された文章がある。それはどのような意図で書かれた文章なのかはよく覚えていないが、東大教授だった多田富雄先生が「30 代までに top journal に論文を発表できなかった研究者は、一生 top journal に論文を出すことはできないだろう」という文章である。余談になるが私の大学院時代及び順天堂大学時代のメンターの 2 人の教授は多田先生の弟子であったことから、私は多田先生の孫弟子にあたることになり、かつ多田先生のご子息を大学院時代に指導したのが私であった。この文章は、「独立する前に所属していた研究室の quality が、その後の研究者人生の多く（あるいはほとんど全てを）を左右する」と言っているのかもしれない。確かに自分の研究者としての人生を考えると、これまで coauthor として top journal に論文が載ったことはあるものの、first author や last author で top journal に論文を出したことがなく、現在の私の研究室の状況を考えると今後も掲載される可能性は低い。また現在の top journal の論文を読むと内容に感動するというよりも、そのデータ量とデータを取得するためにかかった研究費や、どれだけの人数の研究者が関与したかを思って落胆することが多い。言うならば現在の top journal に掲載される論文の多くは個人の研究ではなく（もちろん例外はあるが）、PI を中心とした大きな研究グループの成果であ

る論文が多いと言っても過言ではない。私が助教～准教授の頃は常に海外の競争相手のことを意識して研究し、なんとか top journal を目指してもがいていたが、最近では自分たちが納得した内容の論文で、ある程度以上の雑誌に掲載されればそれで十分だと思えるようになってきた。現在のラボメンバーと私の能力、私の獲得した研究資金を考えるとこのようなスタイルで論文を執筆するのが理想だろうと思う今日この頃である。

(中野裕康)

東邦医学会雑誌 第 66 巻 第 3 号

令和元年 9 月 1 日発行

編集兼 伊豫田 明
 発行人

〒143-8540 東京都大田区大森西 5 丁目 21 番 16 号
 東邦大学医学部本館 3 階

東邦大学医学会

(振替口座 00190-6-95793)

tel. 03-3762-4151 ex. 2465/fax. 03-3762-5077

e-mail: igakukai@med.toho-u.ac.jp

http://tms.med.toho-u.ac.jp

東京都北区西ヶ原 3-46-10

株式会社 杏林舎